棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第13話）

秩父宮ラグビー場

若い頃、NHK将棋講座の講師を一年間務めさせて頂いたことがあります。その時に収録の都度ADとして一緒に仕事をしてくれた明治大学の青年と出会いました。ある時、彼が「島先生、ラグビー早明戦を見に行きませんか」と誘ってもらったのが、その道の観戦入門の始まりです。

もちろん自身経験はないし、当時ルールもほぼ知識がありません。大丈夫です、自分が解説しますから、と彼は言ってくれて、国立競技場の学生中心の応援席で初めて試合を見ることとなりました。大変な熱気で、早明戦は12月第一日曜日の伝統ある、特別なゲームだということを後から知りました。

レフリーの笛が鳴る度に試合が止まりますが、反則の種類と意味がわかりません（現在は反則の理由をアナウンスしてくれますが、当時はそんな親切なものはないのです）。将棋の駒の動かし方がよくわからない状態で対局を見るより、もっと絶望的な状態ですが、彼が懇切丁寧に「いまのはスクラムペナルティー、ノックオン」など意味も一つ一つ教えてくれます。何とありがたい解説者でしょう。そして時には彼も、選手の名前を叫び興奮状況になります。

しかし一転、早稲田のペナルティーキックの状況になると静かに待ち「いまスタンドは７割が明治ファンで、学生の中にはマナーの悪いのもいて、早稲田のキックの時に騒いだりするんです。そんなのは応援じゃない。明早戦と呼ぶのも間違いで、あくまで早明戦なんです」と、初観戦の私にルールだけでなく、正しきファンの姿勢とモラルを教えてくれました。大恩人です。

造詣深いラグビーファンの方のために付け加えておくと、15番今泉清選手※1がロスタイムでのノーホイッスルトライ、角度が超難度なゴールキックをSO守屋選手※2が決めて24－24のドローになった一戦です。両大学絶叫の幕切れで、最初の観戦が藤井・永瀬戦、藤井・伊藤戦のようなタイトル戦で白熱した終盤を見たのと同じように、凄さだけは理解できました。

そんな伝道師のおかげで、一年もたつと私も毎月ラグビーマガジンを購入し、選手の出身高校を記憶、自分でチケットを予約する立派な大学ラグビーフリークに成長しました。ある日の対局後に感想で「明治大学の強いスクラムをイメージして、抑え込んで指しました」と意味不明な表現を述べると、それが朝日新聞の観戦記に載り、明治大学ラグビー部長さん（運良く将棋ファン）から、早明戦のチケットを拝受し、そこから長きにわたり親しいお付き合いをさせて頂くようになりまし

た。後から思うと絶妙の感想で、棋士の数少ない余録です（笑）。

興奮がピークとなる、国立競技場の準決勝は毎年１月２日と決まっています。実は昔から一門の新年挨拶がその日で、多くの弟子が集まる暗黙の了解があるのですが、何故かラグビーファンになってからは、元日に自分だけ一人で挨拶をすませる習慣がつきました。いま思うと師匠もいい迷惑としか思えません。

平成６年度の冬、たまたま棋聖戦で時の羽生善治棋聖に挑戦することができ、12月スタートのタイトル戦は連敗で早くもあとがなく出雲での第三局。対局日が大学選手権の決勝の日で、局面が中盤の難所の頃にふと思い出し、控え室で５分だけ明大対大東大のゲームを観戦させてもらい、気持ちを入れ直し対局室に戻ったこともありました。ただハートだけでは将棋は勝てません。

一人で見にいくこともあれば、棋士仲間や友人を誘うこともそれからはしばしば。改装前の秩父宮ラグビー場は、何といっても旧将棋会館から徒歩10分の至便さです。特に金曜の対局で夜中に勝利し、翌日スタジアムに入りグラウンド前のアップから観戦すると、冬のかわいた芝生と土のにおいが、とても心地よく思えたものです。

昨年、1000勝の大記録をあげた森内俊之九段、郷田真隆九段ほか数人で、12月下旬に当時交流試合と呼ばれていた準々決勝を秩父宮に見にいくことがあり、席もグラウンドレベルのすぐそば（国立競技場とは、比較にならないほど選手が間近で興奮します）を予め抑え、みんな防寒万全で観戦です。その日は、NHKの中継も入っており、直接観戦で臨場感を味わい、家で細かい部分を実況解説付きでビデオで見るのが、ファンの王道観戦で、その日ももちろん定跡通りの手順です。

熱戦に満足して帰り、夜自宅にてわくわく再生を始めたところ、ゲームが始まる前にカメラが客席のほうを撮っていて、何とその映像に結構長い秒数、森内さんや郷田さん、私が楽しげに話しているところが映し出されておりました。

不思議なもので、思わず嬉しくて何度も見直してしまいました。その頃はランキング上位でNHK杯の対局では、何度となく出場させて頂いていたのですが、自身の対局や解説は視聴も録画もしない慣習なのに比べ、単なる一ファンとして、スタンドで映されていたことが何故あんなに嬉しかったのでしょう。自分でもわかりません（森内さんも、ラグビー見にいかれていたでしょう、と知人に言われたとお聞きしました）。

観戦中も寡黙ながら、年季の入ったラグビー審美眼を持っていたのが郷田九段です。その試合で逆転のトライがあった際に、場内立ち上がって大興奮の中でも彼が妙に落ち着いています。そしてポツリと「スタンドオフからフルバックへのパスが、スローフォワード※3気味のように見えたけど」と一言。録画で確認すると、その場面で解説者がVTRを見ながら、このパスは微妙でしたね、と言葉を濁していました。目の肥えたファンの存在は、どの世界でも貴重です。

※1 大分舞鶴～早大の大スター。吉田義人（秋田工～明大）と並び称される。

※2 早大学院～早大。勝敗も大観衆もすべて無で「何も考えずに蹴りました」の感想が有名。

※3 ボールを前にパスする反則。ラグビーは平行より後ろに投げなければならない。